

犬の感情

弘前大学教育学部附属小学校

高杉 宥 佑

ぼくは、『タロとジロ〜南極で生きぬいた犬〜』という題名の実話の本を読みました。読んだ理由は、題名に「南極で生きぬいた犬」と書かれていたからです。「南極で生きぬいた」という事よりも深く考えたのは、「生き物としての犬」についてでした。

この本には、今から六十七年前に行った南極観測の犬ぞりの役目をする二十四ほどの犬達と、犬係の北村さんと菊池さんが体験した話がかかれていました。南極観測のため集められた犬は、二十四ほどもいました。性格は様々さまざまでしたが、北村さん達のおかげで無事に計画が進められました。しかし、やはり南極なので残念な事もあり、犬がどこかへ行ってしまうたり、死んでしまったりと十五匹にへってしまいます。さらに、菊池さん達は犬達を残して帰らないといけなくなってしまう、犬は全滅つしてしまう事態になってしまいます。それから一年ほどたち、もう一度南極へ行くと、子熊くまほどの大きな犬が見つかったのです。名前はタロとジロ。一番年下の

二匹でした。なんとこの二匹は生きていたのです。

この話には、時々、犬の性格や気持ちを表す所が出てきます。例えば、十六匹ほどにへってしまったところ、基地の犬小屋に病気にかかり死にそうな犬が出てしまった場面がありました。基地にもどった菊池さんや他の隊員が心配している時、めったに犬小屋に入つてこない他の犬達も入つてきたのです。この場面で、ぼくは、めったに入つてこないのに、「心配をして入ってきたという所から、やはり犬は感情や気持ちをもつてるんだなと思いました。ぼくはそこに特に興味をもちました。もし、人間と同じはずかしいやうれしいという感情をもっているなら、例えば犬を売ったりする時、自分から飼い主を選ばせてあげて、勝手に買つたりされない方が犬にとつて良い事なんじゃないのかなと思いました。

ぼくがこうやって犬について考えるようになったのは、犬との南極観測の生活が多く書かれていたからという理由もありますが、隊員達のやさしさがある行動を読んだからです。

例えば、犬が足のうらをけがした時に、くつ下をはかせてあげていたみをおさえてあげた、という場面がありました。このような菊池さん達の犬に対するやさしい、子どもにやるよ

うな思いが、犬に対する多くの気持ちを変えたのだと思います。犬をかわいいやしと見るのもいいですが、犬は感情を持った生き物としても見てほしいです。